

【多様性】チーム

「私」のこと知ってる？～「私」の思いを想像し、
世界で起きている様々な問題を考えよう～

【実践者】

氏名	藤井 美奈子	学校名	長野県長野市立大岡中学校
担当教科等	理科	対象学年（人数）	中学校全学年（11名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2023年 10月 ～ 11月（全5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

特別の教科 道徳・人権教育

02 単元名と単元目標

単元名：「私」のこと知ってる？～「私」の思いを想像し、世界で起きている様々な問題を考えよう～

単元目標：特別の教科道徳の中で、人権教育を扱うことを位置付け、子どもたちが世界で起きている様々な問題を多面的・多角的に捉えることを通して、世界の中の日本、世界の中の「私」について考えを深め、自己の見方や考え方を見直し、分断や差別のない社会の実現をしようとする意欲を育てる。

関連する学習指導要領上の目標：

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

03 単元の評価規準

①知識及び技能	自由、責任、正義、平等、尊厳、権利、義務、相互依存性、連帯性などの概念や、人権侵害などに関する歴史や現状に関する知識、人権課題の解決に必要な概念に関する知識をもとに、考えたり、書いたり、伝えたりすることができる。
②思考力、判断力、表現力等	自分の経験や価値観から、自分の考えを話したり、自分とは異なる友の考えを受け止め答えたりすることができる。また、答えが1つではない問いに対して、多面的・多角的に考え続けることができる。
③学びに向かう力、人間性等	日常生活での場面や、友との関わりの中で、道徳的価値観を具体的な行為として表そうとしていくことができる。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈理由〉

これまでの教員生活の中で、特別の教科道徳において、教科としての研究を行ってこなかったことを省察した。さらに、人権教育において、どの学校でも、人権教育月間はあるものの、講師を招い

て講演会を設定し、子どもたちに感想記入を求めたり、長野県同和教育推進協議会が発行する資料「あけぼの」を用いて同和問題やハンセン病など、具体的な人権課題に即した個別的な視点の諸問題を扱ったりすることで終わり、体系的な学びの場を築くことができていなかった。また、教材研究において、自分の中にある道徳的価値観を基準に行っていたことや、教育としての真の多様性を勉強せずに、人権教育の授業を展開していくことの危険性を感じるようになった。そこで、道徳教育のあり方や、人権教育の基本方針、人権教育を取り巻く諸情勢から学び直す必要性を感じるようになった。

そこで、本単元を道徳の位置にあげ、人権教育の3つの側面から捉えるために、途上国で起きている諸問題の実際と、それらが深刻化する原因などの資料をもとに、そこで生活する子どもの姿から、権利条約などの知識的側面に焦点を当てることを考えた。また、題材として、本単元の各時間で扱うそれぞれの「私」を選定することで、他者への共感性を高め、道徳的諸価値の理解をもとに、価値的・態度的側面を育てていくことを計画した。つまり、道徳科における「人間理解」及び「他者理解」を、人権教育における「他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度」と重ねて単元を組むということである。さらに、単元を通して、中学1年生から3年生までの発達段階の異なる子どもたちが交流する場を設けることで、課題に対して思考する技能や見極める力、他者の相違を認めて受容するなどの技能的側面を育てることができるのではないかと考えた。

〈意義〉

本研修で学んだことを、子どもに還元するために、授業者が感じたことや悩んだことを整理し、子どもの権利、経済発展とゴミ問題、差別問題など、途上国が抱える複雑に絡み合った問題に対して子どもたちと考えていきたいと願った。授業者とザンビアの心の距離と、子どもたちのそれとに温度差があることを冷静に受け止め、遠く離れた世界の自分を自分に近い存在として、子どもたちが考えを深めていく姿の実現のために、授業者は、それぞれの時間で「私」という実在する人物に焦点を当てることを考えた。

〈児童/生徒観〉

本校は、山間部にある全校11名の小規模校である。全校生徒のうち9名が山村留学生で、山村留学センターと受け入れ農家で寝食をともに過ごしているため、生活そのものが異学年との交流である。そのため、3学年合同の授業を行っても、先輩に遠慮して自分の考えを言うことができないということではなく、1年生が2・3年生の考えに共感したり、2・3年生が1年生の理解を助けたりして、自己の考えを深めていく姿が見られる。また、教員も学年窓口（いわゆる担当学年）は決まっているものの、2週間ごとに学年をローテーションし、学級活動に関わっていることや、学校行事等で地域との関わりがあるため、一般的な学校に比べ、異世代の交流も多くある。また、都市農村交流で訪れる他校の中学生との出会いもあり、それをきっかけに、視覚障がい者との関わりができ、障がい者に対する自己の理解を深めたり、地域住民との関わりによって、人とつながることの大切さを感じたりするなど、他者を受容し共感できる素直さや人懐っこさをもっている。

一方、山間部で生活しているため、塾に行く、買い物に行くなど、自分で自由に行動することができず、不便さを感じていることもある。また、同世代との交流が限られていることから、授業等で、多様な考えに触れる機会が少なく、思考が限定されることもある。そこで、本単元を通して、世界を捉えることで、多様な考え、多様な生き方を知り、多様性社会の中で自己を表現する力と、

他者を受容する力を育てていきたいと考えた。

〈教材観・指導観〉

1 時間目は、谷川俊太郎の「そのこ」の詩の描写を、子どもの権利条約と照らし合わせながら読み解き、「そのこ」が住む世界を想像することで、守られていない子どもの権利を多面的・多角的に分析していく子どもの姿を期待している。さらに、自分にはたくさんの権利があるということと、権利が守られていない子どもたちが世界中に多くいるという事実を知った子どもが、自己の見方や考え方を見直し、人権擁護の重要性を感じながら、分断や差別のない社会の実現を切望することを期待している。たとえ、「問題が大きすぎるが故、今の自分に直接にできること等ないのではないか」と子どもが悲観しても、世界で起きている出来事の現状を知ることの必要性を感じたり、物事の本質を見ることの大切さに気付いたりすることが、公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲や態度につながると授業者は考えている。

2 時間目は、「ゴミ山にいる私」が抱えている問題について、“ゴミ山の実態”，“ゴミを拾う理由”，“日本のゴミ山”の3つをテーマに、ジグソー法を用いて「ゴミ山にいる私」やその背景にある問題を多面的・多角的に分析することで、「ゴミ山にいる私」に必要なことを想像しながら、先進国に住む私たちと、この問題の関わりについて考えていくことを計画した。前時に学習した子どもの権利条約の様々な視点を思い出し、「ゴミ山にいる私」が守られていない権利を想像しながら、途上国の問題を世界全体の問題として捉えることで、解決しなければいけない問題として考えていく姿を期待している。

3 時間目は、途上国が抱える問題点やゴミ処理における日本の制度を学んできた子どもたちに、日本のよさと問題点を考える場を設けることで、今まで当たり前感じていたことが、当たり前ではなかったことに気づき、よさとして捉え直したり、他国との関わりによって、日本のよさが作り出されていることに気付いたりする姿を期待している。また、これまで途上国が抱える問題を考えてきたが、途上国のよさについてイメージできる子どもは少ないと授業者は考える。そこで、直接聞いてみないと分からないという子どもの思いを引き出し、本物の声を聞く場として、授業者がザンビア訪問中に会った、HIV 孤児と向き合う NPO 団体「礎の石孤児院」で活躍している日本人のムタレ桜子さんとのつながりを活用し、ザンビアの中学生とオンラインで交流できる場を計画している。どのような交流にしていくか話し合う中で、相手から聞きたいこと、見てみたいこと、自分から伝えたいこと、見せたいことなど、ザンビアの環境やザンビアで生活する「私」に意識を向け、相手の立場に立った物事の見方や考え方で、自分たちの思いを伝えようとしていく姿を期待している。

4 時間目は実際に、コミュニティースクール（NPO などの支援による学校）に通うザンビアの中学生とオンライン交流することで、遠く感じていたザンビアとの心の距離が縮まり、途上国の問題をより真剣に受け止めたり、自分にできることを考えたりしていく姿を期待している。子どもたちは、これまでに交流することのなかった自分とは違う環境で生きる同世代の姿や考えに触れ、楽しいと思うことや、幸せを願う思いは自分と似ているということを感じ取ることで、世界の人々の平和を願う気持ちを大切にしようとする姿を期待している。

本時は、授業者がザンビア訪問中にムタレ桜子さんにインタビューしたときの動画を視聴する場面を設けることで、前時にザンビアの中学生と心的距離が近くなったと感じていた大岡中の子ども

たちが、差別されている現実や、たたかわなくては生きていけない厳しさを突きつけられることで、再び、自分たちと大きな違いがあることに気付くとともに、これまでの学びを思い返ししながら、差別を生み出す社会の不便さや不公平さを多面的・多角的に考えていく姿を期待している。さらに、ムタレ桜子さんの言葉の真意を想像する場面を中心に据え、差別が起こる社会の構造に着目しながら、意見交流を通して、差別に対する自己の考えを深めていく子どもの姿を期待している。

05 単元計画（全5時間）

時数	人権教育の視点・ (道徳教育)	学習のねらい	学習活動	資料など
1	知識的側面 技能的側面 (C 公正・公平/ 社会正義)	・「そのこ」を読み、感じたことを共有する場面で、子どもの権利条約と照らし合わせながら「そのこ」が住む世界を想像し、守られていない子どもの権利を多面的・多角的に捉えることを通して、人権擁護の重要性を理解するとともに、人権擁護の実現に向けて行動しようとする意欲をもつことができるようにする。	1 「私」と出会う。【全体】 2 資料「そのこ」を読み、3つの班で場面を分け、「そのこ」が住む世界を、子どもの権利条約の観点から想像する。【班】 3 班で考えたことを発表し、共有する。【全体】 4 「そのこ」の詩の空欄に入る言葉を考える。【班・全体】 5 本時の学習を振り返り、自己の変容を自覚化する。【個人・全体】	谷川俊太郎 「そのこ」 ユニセフ 「子どもの権利条約カード」
2	知識的側面 価値的・態度的側面 (C 国際理解/ 国際貢献)	・「ゴミ山にいる私」が抱えている問題を共有する場面で、ジグソー法を用い、「ゴミ山にいる私」やその背景にある問題を多面的・多角的な見方で分析することを通して、途上国の問題を世界全体の問題として捉え、解決しようとする意欲をもつことができるようにする。	1 「ゴミ山にいる私」の写真から課題を見出す。【全体】 2 A ゴミ山の実態、B ゴミを拾う理由、C 日本のゴミ山の3つのグループに分かれ、それぞれの課題のエキスパート活動をする。【エキスパート班】 3 エキスパート班の情報をジグソー班にもち帰り「ゴミ山にいる私」が抱えている問題を分析する。【班・全体】 4 私たちの世代が途上国のために努力するべきことについて考える。【個人・全体】 5 本時の学習を振り返り、自己の変容を自覚化する。【個人・全体】	廃棄物管理公社訪問時の動画 A ゴミ山の実態 B ゴミを拾う理由 C 日本のゴミ山
3	技能的側面 (B 相互理解/ 寛容)	・日本人から見る日本のよさと問題点、ザンビアのよさを考える場面で、ザンビアの人から聞きたいことや見たいことについて、項目を立て、内容を検討し合うことを通して、相手の立場に立った物事の見方や考え方で、自分たちの思いを伝えようすることができるようにする。	1 日本のよさと問題点について考える。【個人・全体】 2 ザンビア報告書を読み、ザンビアの中学生の暮らしを想像する。【全体】 3 オンラインで交流するための内容を考える。【全体】 4 交流内容を班で分担し、文章を考える。【班】 5 本時の学習を振り返る。【個人・全体】	コーナーストーン オブホープ・ンサン サ孤児院訪問時の動画 報告書
4	価値的・態度的側面 技能的側面 (B 相互理解) 寛容	・ザンビアの中学生とオンライン交流する場面で、自分たちの思いを伝えたり、互いに質問し合ったりすることを通して、心的距離の縮まりを感じ、途上国の問題をより真剣に受け止め、	1 前時に計画したことをオンラインで発表する。【全体】 2 ザンビアの子どもたちの発表を聞く。【全体】 3 それぞれの発表に対して、質問・感想を伝える。【全体】	ZOOM

		相手と自分を重ねて考えたり、これまでの自分の考えを見直したりすることができるようにする。	4 本時の学習を振り返り、自己の変容を自覚化する。【個人・全体】	
5	価値的・態度的側面 技能的側面 (C 公正・公平/社会正義)	本時案に記入	本時案に記入	ムタレさんインタビュー動画

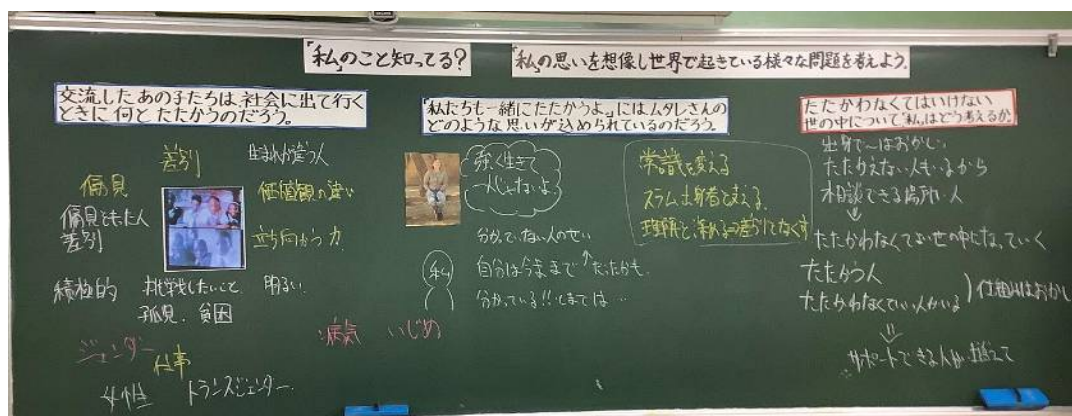
06 本時の展開（5 時間目）

本時のねらい：前時交流した NPO 団体「礎の石孤児院」で活躍しているムタレさんの動画を視聴し、スラム出身の子どもたちが社会に出ていくときに待ち受けている問題や差別する人の具体について考えながら、ムタレさんの言葉の真意を想像し、意見交流することを通して、差別が起きる現在の社会の構造を多面的・多角的に捉え、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲をもつことができるようにする。

過程	学習活動 【学習形態】	予想される生徒の意識や姿（◎）	教師の支援（・）評価
導入 (10 分)	1 動画を視聴し、感想を共有する。 【全体】	◎交流したあの子たちが、学校の先生からいじめられるなんてびっくり。 ◎スラム出身ということで、差別に遭うことはあるだろうけど、落ち込む人生を選ぶのか、たたかう人生を選ぶのかって厳しいなと思った。	・動画を視聴し、前時に交流した相手が、差別を受けている事実に対し、感じたことを尋ね、被差別者の思いに共感した意見を取り上げることで、被差別者の思いに寄り添うことができるようにする。
展開 (30 分)	2 差別する人や差別意識によって起きる問題に着目する。【班・全体】	交流したあの子たちは、社会に出ていくときに、何とたたかうのだろう。 ◎差別する人から、嫌なこと言われたり、避けられたりするから、それとたたかっているのだと思う。 ◎「なんであなたが？」という先生の言葉は、スラム出身の人が試験を受けることがダメみたいな言い方をしていたから、差別されてできないことがあるんだと思う。就ける仕事の種類とかみたいに。だから、社会の仕組みとたたかうってこと。 ◎被差別者じゃない人が差別をするから、裕福な人とか、この問題を分かっていない人が、見た目の違いなどから、相手を低く見たりしている。 ◎今、LGBTQ 問題で、誹謗中傷によって、自殺してしまうという問題がある。それで、LGBTQ の人が権利を求めて裁判をして制度を求めたりしている。 ◎差別されているということだから、女性差別とかよく聞く。権利を手に入れるために、女性がたたかって法律ができたということを社会で勉強した。	・交流したあの子たちが社会に出ていくときに、何とたたかっているのか尋ね、班で話し合う場を設けることで、差別する人の存在や差別意識によって起きる具体的な出来事に着目できるようにする。 ・どのような人が、どのような人を差別しているのか考える場を設け、スラム出身者と境遇が異なることに触れた意見を共有することで、自分自身と差別する側とのつながりについて意識することができるようにする。 ・補助発問「私たちの身のまわりにこんなたたかいはある？」と尋ねることで、ザンビアの階級差別問題から、性差別など、「私」の生活の中にある差別問題に視点をあてることができるようにする。 ・ザンビアの差別から様々な差別問題に広げて考えることができない生徒には、たたかっている相手や仕組みに着目す

まとめ (10分)	3 ムタレさんの言葉の真意を想像し、差別問題について、多面的・多角的に考える。 【個人・班・全体】 4 公正・公平に過ごせる社会の構築のための「私」の考えをまとめる。 【個人・全体】	中心発問 「私たちも一緒にたたかうよ」にはムタレさんのどのような思いが込められているのだろう。 ◎ムタレさんは、スラムの孤児に勉強する場や生活を支える施設を作る活動をして、社会の格差みたいなものを解消していこうとしているから、私もたたかっているんだよ、という思い。 ◎たたかっているものがとても大きな問題で、何度もぶつかることがあるから、「一人じゃないんだよ」と、不安にさせないようにしている。 ◎ムタレさんはこの現状を変えたいと思っていて、スラムの子たちがそこでへこたれてしまったら、今の社会を変えることができないから、お互いに頑張っていこうという気持ち。 たたかわなくてはいけない世の中について、「私」はどう考えるか。 ◎歴史を辿ると、権利を手に入れるにはたたかうことも必要だと思う。でも、たたかうことになった前提には、不平等さがあったわけだから、その不平等さを解消していくことが大事なのだと思う。私たちは、前提が違うのだから、誰もが同じ感覚、同じ条件で生活しているわけではないということを考える必要があると感じた。自分と同じ感覚で考えてしまうことが、差別を生み出す原因になっていると思った。 ◎はじめは、差別に対してたたかっていくという言葉を受け入れていたけど、たたかわなくてはいけない世の中を作っていること自体に問題があるんだと思った。このたたかいは、私たちの差別する心によって生まれているのだから、違いを取り上げて攻撃するのではなく、多様な違いを認めていくことが大事。	ることで、「私」の生活の中にある差別問題に視点をあてることができるようにする。 ・ムタレさんの言葉の真意を想像し、ムタレさんとスラムの子どもの思いについて考える場を設けることで、それぞれの気持ちに寄り添うことができるようにする。 ・個人で考えた意見を班で共有し、より多様な意見と触れあう場を設けることで、現在の社会構造を多面的・多角的に考えることができるようにする。 ・差別や偏見がある現状を踏まえ「たたかわなくてはいけない世の中について、「私」はどう考えるか」と尋ね、視点を『私』にもっていくことで、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲を高めることができるようにする。 被差別者が差別されない世の中を築くために、不平等な社会の構造に着目しながら、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲をもつことができたか、発言や学習カードの記述から評価する。 ・差別が生まれる社会構造にばかり視点が向いている生徒には、「それ（社会構造）に対して『私』はどのような考えが必要だろう」と尋ねることで、問題に対する自分の思いや考えに目を向けることができるようにする。
----------------------	---	---	--

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

被差別者が差別されない世の中を築くために、不平等な社会の構造に着目しながら、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲をもつことができたか、発言や学習カードの記述から評価する。

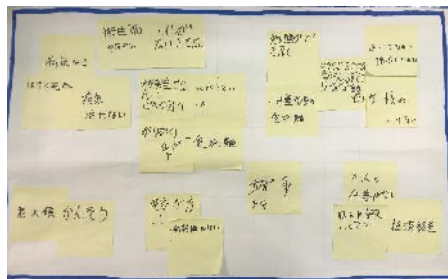
09 学校外との連携

NPO 団体「礎の石孤児院」より、ムタレ桜子さん

10 学びの軌跡

・既習の知識をもとに、途上国が抱える問題について考える S 生（第 0 時）

単元が始まる前の 7 月、途上国が抱えている問題について、S 生（3 年生）は、児童労働、食糧難、悪天候、経済格差、衛生面など、複数の要素を挙げた。一方、K 生（1 年生）は、児童労働、学校に行けないなど、比較的狭い要素で問題を指摘していた。3 年生は、社会科の地理的分野だけでなく、公民的分野、歴史的分野などから途上国を捉えることができるようになってきているのに対し、1 年生は地理的分野の中でも、ガーナにおける児童労働の知識が、途上国を捉える手がかりになっていることが分かる。各班で挙げた問題について関係性を求めると、S 生はこれらの付箋を衛生面、天候、インフラ、経済、教育、平和の 6 つの領域に分けて配置した。このことから、それぞれの問題が独立していると考えていることが窺える。一方、それぞれの問題はつながっており、「ゆえに、お金があれば解決できる」と考えている他の班の A 生（2 年生）の意見を聞きながら、S 生は納得いかない表情を見せた。S 生は、これらの問題がお金で解決できるものではないことをどこかで感じているのだろうと授業者は捉えた。



途上国が抱える問題を挙げ、
グループ分けした場面

・「そのこ」の心の中を知りたいと考える S 生（第 1 時）

谷川俊太郎の「そのこ」の詩の一節から、「そのこ」が守られていない権利を考える中で、S 生は、A グループの仲間と「休み、遊ぶ権利」や「教育を受ける権利」、「生活水準の確保」などの権利を挙げた。

その後、B・Cグループの仲間と考えを共有すると、「健康・医療への権利」や「プライバシー保護の権利」「適切な情報の入手の権利」など様々な権利が挙がる様子から「確かに。それもそうだね。」と納得し、「そのこ」の生活全体を見ることで、それぞれの権利が関連して守られていないことに気付いていく姿があった。また、そのこの未来のために何ができるか考える中で、「より大きく課題化して国や世界を巻き込んで援助する」という記述から、「そのこ」が抱える問題の大きさを推測し、改善していくには、社会的な仕組みを作ることが必要であると考えていることが窺える。その仕組みを作るには、自分たちの考えだけでなく、当事者の思いに寄り添うことが必要であるということにも着目していることが分かる。

現実的に言えば、自分から何かの法人に入ってこの問題についてより大きく課題化して国や世界を巻き込んで援助する。そのこの場所に行き、そのこに将来の事を聞いたり、自分から様々な選たくしを教えてあげればいい。又、大人の見解を聞いてあげるのが大切なので大人にも様々な選たくしを教えてあげる。



守られていない子どもの人権について考える姿

・ゴミ山にいる「私」から、途上国の問題だけでなく、日本にも様々な問題があることを述べるS生（第2時）

第2時は、ジグソー法で、子ども同士の対話を通して主体的、協働的な取組をねらった。しかし、情報量が多く、互いの情報を共有することに時間がかかったことや、何をもって考えが深まったかという教師の見通しの甘さも原因となり、考えを十分に深めていくことができなかった。S生の「私たち日本人とはかけ離れた世界の話だった」という記述から、途上国の問題を理解するものの、日本には日本の問題があり、私たちにあって優先すべきことは自国の問題であると考えていることが理解できる。もちろん、国際支援も大事であるが、自国の問題改善に視点を向けることは当然である。一方で、これまで当たり前と感じていた日本の経済面や衛生面の安定性に着目していることは、他国との比較を通して生まれた視点であり、日本を多面的・多角的に捉えてきた姿であると言える。

改善策
・税金を高くする → 金銭的に生活できない
↓
借金・寄付を受ける
・沢山の人が働ける場所をつくる
・行って意見を聞く
・ゴミ出しについて教えてあげる



個人の考えをグループで共有している場面

私たち日本人とは、かけ離れた世界の話だったけれども、自分からこうなると考えると嫌な感じになってくる。ザンビアは、金も技術もなく、ゴミの山が沢山できてしまうことが分かった。日本では、働く場所も収入も税制が一律であるし、国民の税金も均等な外、あてまど保たれている人など、支援したい気持ちにはなれたけど、私も日本も、そうは言えないと思った。

ザンビアの現状（2017）
ザンビアは、金も技術もなく、ゴミの山が沢山できてしまうことが分かった。日本では、働く場所も収入も税制が一律であるし、国民の税金も均等な外、あてまど保たれている人など、支援したい気持ちにはなれたけど、私も日本も、そうは言えないと思った。

他の班の考え

・ザンビアの中学生の思いを知り、心の距離の縮まりを実感するS生（第3・4時）

子どもたちは、これまでと違う見方で日本を捉えるようになってきたことを感じ、授業者は日本の問題点や日本のよさについて質問した。すると、下記のような要素が挙がった。少子高齢化や過疎化は子どもたちが生活している大岡と深く関係していることや、昼食時に見ているNHKニュースや国会中継で話題になるため、日本の問題点として捉えていることが窺える。日本のよさについては、平和や治安のよさ、水が飲める、みんなが教育を受けられるという声が挙がった。H生（1年生）は、「親が子どもを学校に行かせられない状況が他の国にはあったから、日本はちゃんと親が学校に行かせてくれるから、そこがいいところ。」と答えた。1年生らしい答えであるが、前時までの途上国の問題を意識しながら

次に、子どもたちはザンビアの子どもたちに聞きたいこと、ザンビアの子どもたちに伝えたいことの2つの側面から、様々な項目を付箋に書き出した。自分たちが住んでいる大岡のことや、日本とザンビアの学校のことなどを皮切りに、ザンビアの男女の役割（性差別問題）や、ザンビアがこれからどんな国になってほしいかなど、ザンビアに住む人たちの心に触れた質問も考えた。S生は、H生（1年生）とペアになり日本とザンビアの学校をテーマに質問を考えた。

[illegible]

S 生と H 生は日本の義務教育制度や定期試験、学校嫌いの人がいることなどを説明することに苦戦していた。直訳しても伝わらない可能性や、誤解を生む表現に気を配る姿からは、相手意識をもって活動していると言える。また、大岡中学校で栽培しているシイタケを披露するなど、興味をもって聞いてもらう工夫を考えた。他の班では、三線の弾き語りや日本舞踊の扇子を紹介するなど、日本の伝統文化を守っていこうとする自分たちの思いを伝えながら、ザンビアの伝統について質問をした。S 生の振り返りからは、交流し、互いの思いを伝え合うことができた喜びと、ザンビアの子どもたちの夢を尊重する気持ちが表れていることを読み取ることができる。第 2 時では、自分とかけ離れた世界のことと捉えていた S 生であるが、ザンビアの子どもたちの平和を願う気持ちに頷いていたことから、日本が平和を願うように、自分たちと同じであることを実感していた姿だと授業者は捉えた。さらに、自分の知っている英単語、準備してきた英語表現を使い、頑張ってコミュニケーションをとったという経験により、ザンビアの子どもたちとの心的距離の縮まりを感じていた。

自分たちだけが知っていること、相手しか知らないこと、それは、
実際に話してみないと分からないことでもあると思った。
遠いから、話したい(伝えたい)ことが、沢山、挙がったし、
聞きたいことも沢山、挙がったのでとても面白いと思った。
次回、日本に車や米をもってもう入るようにな、かり伝えたい。

サンヒアの子と話してみても、正直難しくて大変だ。た。でも相手も自分も笑顔で話すとや、聞き取ろうとしたし、伝えようと努力することか。分からなくともコミュニケーションの一歩だと思った。中学生(試験やっている人)だから頭も良かったし、一生懸命聞いてくれて嬉しかった。将来の夢や望みなどし、かり答えてくれたし、本当にその夢などかかちなてくれるといいと思った。

授業者は、研修中に感じたモヤモヤと、同じモヤモヤを子どもたちと共有したいと思い、第3時に扱った資料をもう一度提示し、孤児と孤児でない子どもが同じ学校で勉強をしていくことについて、感じた

ことを聞き出した。すると、S 生は「お金を払える人と、そうでない人の関係性が気になる。」と授業者が危惧した差別のモヤモヤと同じことを述べた。前時の交流を支えてくれたムタレさんにつながりができている子どもたちは、差別について語られた動画を真剣に見つめ、子どもたちが教師にいじめられている現実があることを知り、驚いていた。その後、子どもたちはザンビアの子どもたちと同じ差別の仕組みが、「私」の周りにもあることに気付き、ジェンダーや病気などの差別問題を挙げた。授業者は、ジェンダー差別の当事者や女性などが同等に扱われていない仕組みが社会にあることに気付いた意見を全体で共有したが、これらの問題について、さらに問い返したり、他の子どもに尋ねたりして、掘り下げることをしていれば、自分自身もたたかわなければいけない人になる可能性があるということに気付き、最後の問いをより具体的に考えることができたのではないかと省察した。



ムタレさんのインタビューを見る場面



教師のモヤモヤを共有している場面

S 生は中心発問において、「分かっていない人のせいで」という言葉を使ってムタレさんの思いに迫っていった。授業者は本時、単元名である「『私』のこと知ってる？」の「私」を、大岡中の子どもたちを示す言葉として授業を計画していた。なぜなら、差別や偏見などしていないと思っている、今までの「私」が、実は S 生の言う「分かっていない人」であることを自覚し、自分の中にある差別意識に着目させたいと考えていたからである。そこで、授業者は S 生に「分かっていない人って誰のこと？」と問い返した。子どもたちの視線が授業者に集まったことから、子どもたちは、この言葉の意味を理解し、自分自身に向けられた言葉であると感じ取ったように見えた。S 生は「(動画)の学校の先生とか…こういうことを知らない人とか…」と自信なく答えた。その後、M 生(3 年)は「私は、今までアフリカに対して、怖いイメージがあったけど、交流してみて全然そんなことなく、たぶん自分は今まで分かっていない人だったけど、この授業で、ちょっと分かっている人になったんだと思う。」と答えた。さらに、R 生(1 年)も「分かってないわけじゃないけど、分かっている！というわけでもない…」と答えた。この発言を真剣に聞いていた S 生は、ワークシートに「世の中に流されずに自分を保てる人になりたい。自分を相手に置き換えるのも大事」と記入した。イメージや偏見で世の中を見るのではなく、自分で判断できるように考えていきたいという S 生の思いを読み取ることができる。さらに S 生は「正しいがあるたたかいの中で、正しい方にいたのに、否定されて不利になって、それが変えられない事実についてだとしたら、それは違うと思う。」と述べた。性別や出身、身体的特徴など本人の努力によって変えられないことで、不利な状況に立たされ、たたかわなくてはいけない被差別者がいる社会の仕組みは間違っていると考えていることが読み取れる。

2 「私」も戦うよ。には、ムタレさんのどのような思いが込められているのだろうか。

自分が差別を受けた、受けてないに関わらず、差別自体良くないと思っている。小・中学校まで成長してきた子は、少なくとも今まで自分を持て生きていた子たちだから、大丈夫だと思っている。苦しいのは、分かっていない人たちのせいなので、その人たちのせいで、子どもたちの人生をくわしてほしくないし、サポートしたいと思っている。



気付いていなかった意識に気付いた M 生

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

指導観に記載

12 苦労した点

授業者は、世界で起きている様々な問題を人権教育の視点で学習する授業を考えていたが、単元の中で、子どもの考えや子どもの感じ方の変容を捉えることの難しさを予感していた。なぜなら、差別を悪とし、国際協力を支援することは、人権教育の視点および、道徳的価値として誰もが分かっていることであり、「差別や偏見は悪いことで、自分は差別や偏見をしないようにしたい。」「途上国の問題は途上国だけの問題ではないから、実情を知り、自分に何ができるかを考えていきたい。」と答えるのであれば、それは至極表面的で、深く考えた姿ではないと授業者は考えていたからである。しかし、国を越え、世代を越えて課せられた規模の大きな問題に対して、それ以外にどのような言葉で子どもたちが自己の考えを表現できるのか、また、言葉としての表記は同じでも、授業を通して、感じ方や考え方が深まっていると判断するのなら、授業者は子どもの変容を捉える軸を明確にもっていないと評価ができないと感じていた。

自己を見つめ、これまでの自分の考え方と変わってきている自分に気付いたり、それまで気にしていなかったことが気になるようになったりしている子どもの姿を、授業者が見逃さずに捉えるためには、子どもの思いを顕在化させ、議論したいと思える「材」と出会わせることが必要であった。海外研修で授業者が出会った様々なひと・もの・ことはどれも印象的であるが、自分のもつ特権（ある社会集団に属していることで労なくして得る優位性）を普段から意識せず、差別や偏見を受けることの少ない子どもたちが、人権侵害を受けている人の生活や、向き合っている問題を考えることは、想像の範疇を越え、手がかりのない状態を作り上げてしまうことが予想できた。単元を通して、各時間で設定した「私」の思いを想像するためには、どうしても知識的側面が必要になる。しかし、知識を増やしていくと、比重がそちらに傾き、「私」の思いに寄り添ったり、「私」を自分に投影したりする側面が薄くなり、人権教育を道徳教育に位置付けた前提から外れることが懸念された。世界の問題について考える社会科の要素、自己の考えを言語化していく国語科の要素、文化の違いを尊重し、共通言語でコミュニケーションをとろうとする英語科の要素など、他教科と関わり合っていることから、教科横断的な学習形態と捉え、総合的な学習の要素の強さを感じるようにもなった。教科ごとに設けられた見方・考え方を授業者が正しく理解していないと、教科性から逸脱していることに気付かず、評価基準がぶれてしまうこととなる。このようなことから、授業者は、道徳という教科の特徴に重点を置きながら、分断や差別のない社会の実現をしようとする意欲を育てる人権教育の単元展開に苦労を要した。

13 改善点

仲間の発言を受けて、個の考えが刺激され、変化していくような関わり合いが生まれる手立てを増やしていくと、自己の考えの変容に子ども自身が気付くことができると考える。

14 成果が出た点

異学年で班を組んだことで、1年生では出てこない視点をもてるようになったり、3年生が1年生のために、自分の意見を分かりやすく伝えたり、意見を言いやすい環境を作ったりするなど、子ども同士の学び合いができた点。

自分事として考えるに遠く離れた国のことであるが、オンライン交流をすることで、子どもたちの心に、ザンビアの子どもたちとのつながりが芽生え、自分とは異なる境遇で生活している相手でも、その思いを想像し、寄り添うことができるようになっていった点。

被差別者が社会の中でたたかっているものについて考えることで、自分のまわりにある差別の構造に着目することができたことや、被差別者と差別者の関係を考える中で、自分の中にある差別心と向き合うことができた点。

15 自由記述

JICA 教師海外研修「多様性」グループで参観した教師の声

・生徒たちは独自にもっていたイメージを、前時までの交流体験によって肯定的な印象に変化させていたが、本時の「材」は、「教師がスラム出身の孤児の子をいじめる」という衝撃的な事実を生徒に示すものであり、現実を知った生徒たちは他人事ではなく自分事として捉えやすかったのではないかと考えた。道徳科において重視されている自分事として考える上で、授業者の「自分たちの周りには（同じような問題は）ないのか」、「自分（立ち位置）はどちらなのか（どこなのか）」という問い返しが、ポイントになっていた。

・本時は、ムタレさんのインタビューの中で「教師も貧困な人をいじめる」という言葉に子どもたちは静かに衝撃を受けていた。前時には実際にオンラインでザンビアの子どもたちと交流をしていたこともあり、「遠くの『あの子』ではなく、「私の知っている『あの子』」になっていたことが強く影響していた。ムタレさんの「私たちも一緒にたたかうよ」というメッセージを受けて「私もムタレさんのように差別を受けている人のサポートをしたい」という生徒と「なぜ差別が起きてしまうのか」という社会構造に目を向ける生徒として、『あなたはどこにいる』という授業者の声掛けが、子どもたちを自分事＝「わたしはどこにいる」を意識するきっかけになっていたと考える。自分が無関係でない、この授業がなければ分からないままだったと振り返る記述から、授業者が伝えたかった思いが子どもに伝わっていることが読み取れた。

長水南部支会人権教育研究授業を参観した教師の声

・実際に現地に臨んで授業者が体験したり、見聞きたりしたことが、授業のバックボーンになっており、加えてオンラインで現地との授業を仕組んだことで生徒にとって、身近な事として考えを深める機会になっていた。

・「たたかう」とはどのようなことなのかを、自分でも考える機会となった。子どもの中でも色々な「たたかう」姿のイメージがあり、負けないことも差別をなくすことも、知ることも「たたかう」であり、この考えを交換してもさらに深まりが出ると感じた。

・オンライン交流のように、実際に相手と会って、言葉を交わし、理解し合うことが、差別をなくしていく1歩になると感じた。

・教師の実態と授業者の願いの両方が関係し合った題材であり、単元展開であった。中心発問『「私たちも一緒にたたかうよ」』には、ムタレさんのどのような思いが込められているのだろう。」は、多面的・多角的に社会構造のマイナス面を捉えることができるものだったと思う。自分が社会（世界）をどこから見るかによっても変わるし、社会科で捉えたザンビア（アフリカ）という国を、道徳科の視点で捉えることでも、多面的・多角的の捉えは変わってくるだろう。



事後研究会の様子

参考資料・使用教科書

子どもの権利条約カードブック

世界中の子どもの権利をまもる 30 の方法

ぼくは 12 歳，路上で暮らしはじめたわけ

風をつかまえたウィリアム

風をつかまえた少年

パヤタスに降る星

そのこ

真のダイバーシティをめざしてー特権に無自覚な

マジョリティのための社会的公正教育

差別はたいてい悪意のない人がする

2030 年の世界地図帳 あたらしい経済と SDGs

未来への展望

JK，インドで常識ぶっ壊される

本当の貧困の話をしよう

国連子どもの権利委員会委員(監修)

認定 NPO 法人 国際子ども権利センター(編)

甲斐田 万智子(編)

国境なき子どもたち(著)

ウィリアム・カムクワンバ(文) ブライアン・ミラー(文)

エリザベス・ズーノン(絵)

ウィリアム・カムクワンバ(著)

ブライアン・ミラー(著)

山口千恵子(文)

葉祥明(絵)

谷川俊太郎(詩)

塚本やすし(絵)

ダイアン・J. グッドマン(著)

出口 真紀子(翻訳)

キム ジヘ(著)

尹 怡景(訳)

落合 陽一(著)

熊谷はるか(著)

石井 光太(著)